

あそ 9

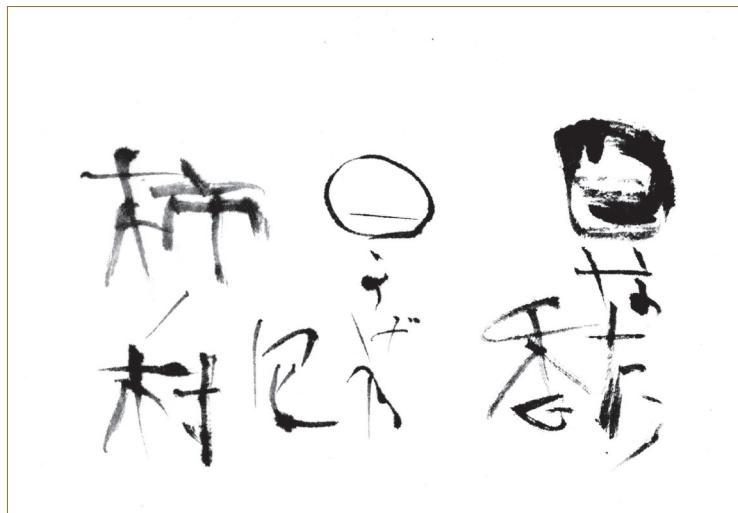
2025



撮影：不寝

鼈 蝋 龜 蝋

日向の香日陰のにほひ柿の村
竹僕



あそ

九月集

坐・誹

佐藤竹僊

初蟬やバスが去つたらもうゐない

蟻の道みなすこやかな者ばかり

炎天につんと徒長枝絲ざくら

どうもかうも合はぬ某國ところてん

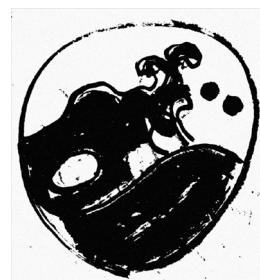
小窗からすぐゐなくなり夏の月

野を這うて紺朝顔の咲きすすむ

春の雨舊假名づかひの字幕かな

春や春自轉車に乗る原節子

さくらから紫木蓮までブランコで



行く夏やカフェに小さき同窓会

夏競馬破滅の預言当たるなら

私はね暑いけれども夏が好き

炎暑やカウチはジャズの変拍子
アイスティー毒吐いてより笑まひけり
夕涼やかすかな鈴と影法師

港に買ふ多摩の冷酒のワンカップ

汽笛一声月なき夏の常夜灯

夕涼しフィルムに写す旅の果

雜詠 須賀敏子

今日も又ゴジラの様な暑さかな

梅雨晴間大事な物は手で洗ふ

アイロンの最後ハンカチ五枚ほど

茄子胡瓜四つ足付けて曲がり角

ファン付きのベスト息子のハンガーに

夕涼み兼ねて返却本を持つ

島へ行く船に並びて飛び魚よ



鉄線花そだてて住まひ引立てる
朝日いで今日をはじめる幸運に
今日ひとひ自分勝手な夏書して
畦道の名を知らぬ草の花かはい
山並つらね水ゆたか稻げんき
離農して安けくなりし友の夏
点滴しひとひ救はるる梅雨さ中
次々おそふ雨雲や強い七月
元気かいつの位置に守宮くる
梅雨明や庭の草丈倍になり
木々の香の濃くなつてゐる夕立雲
昔よりちよつと暑いと生身魂
温泉の銭湯代はり避暑の町

暑き朝

森 なほ子

爆撃のトップニュースや暑き朝

白シャツや背丈伸び出す前の子等

容赦なくドア開きけり冷房車

右手に日傘左手にタオル入りバック

汗拭ひペットボトルもふいてやる

温泉の銭湯代はり避暑の町

昔よりちよつと暑いと生身魂



走馬灯

赤座典子

色筆ペン梅酒のラベルとりどりに

媚殿と同じ銘柄缶ビール

身勝手な咆哮止まず夏芝居

炎熱やまさかの坂のまた一つ

夜濯や気の紛れしと独りごつ

見舞ひ終ふバス停で浴ぶ蟬時雨

四週後夫退院の谷崎忌

逝きし義妹戻りし夫や走馬灯

浮遊する

秋川

泉

坂道の住まひ新たに夏至に入る

涼しさやこのままが良い今日の幸

夕闇やノンアルコールまず一献

朝顔の浮遊する花宙に咲く

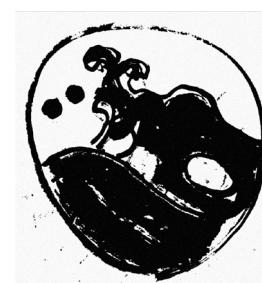
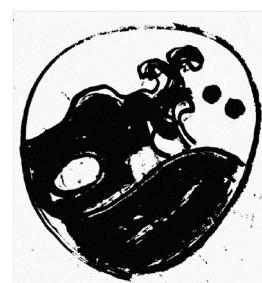
捩花の上へ上へと目の動く

時止まり昼に咲ききる蓮の花

もくもくと雲の湧き出る夏野原

自転車で追ひ追ひかけて遠花火

回転するめまひ遠く蝉の声



ナースセンターお洒落ですねと夏草履

根比ベ九時消灯の熱帶夜

粥飯と点滴が友夏休み

信頼の病窓にあり夏鳥

病室に蜘蛛歩き出し庇ひけり

看護師のいかがですかや路地西瓜

病床に聴こゆ励みの盆踊

病臥より見上ぐ夏空無限大

「退院です」に夏の朝早く明け

小鳥待つ夏の館に帰還兵

地曳き網 篠田純子

朝富士や岩井の浜に地曳引く

漁師より勤労対価の鰯二ひき

吾曳きし鰯のたたきぞ喉に甘し

露國より夏に津波来二十纏

みんみんや勤務是正をせし朝に

馬冷やせそれ牛冷やせ鶏冷やせ



13



12

自轉車で他人の花見を見て通る

佐藤竹僊

「お花見」の形にも、大きなシートを持ち込んで、宴会を開く、出店の軽食も楽しむ、沿岸に腰かけて、桜を満喫する等々、様々あります。作者は、そんな様々な光景を見ながら過ぎていきます。これも立派な「お花見」ですね。（典子）

違ふ木が櫻並木に立つてゐる

佐藤竹僊

「違う木」というのは、桜の木ではない木で、名前も呼ばれない木なのでしょう。この木に名前をつけてやりたい気もしますが、名前を呼ばれないからこそ、疎外感をより強く感じます。この仲間外れの木は、みんな同じがいいという圧力に挫折屈折を感じながら、みんなとは違う方向を向いたからこそ、得られる花時があるのだと思います。（大佳）

妹逝くや麦飯育ちの背比べ

七郎衛門吉保

作者は、戦後の物資のない時代に食べ盛りの少年期を過ごしたと読みます。栄養状態のよくない中でも、決して暗い気持ちにならずに、希望を失わずに、遊び、食べ、学んで、妹さんとも背比べ

をして、競つて体を大きくしていたのを想像します。作者の妹さんにお悔やみ申し上げます。（大佳）



米飯に麦が入ると麦の茶色の線が目立つ。麦が入つてゐることがすぐ判明。現今は麦を、コレステロール低下、血糖値上昇抑制、満腹感による食べ過ぎ防止で肥満や生活習慣病の予防に役立つ等々で積極的に食べる時代。戦後は増量が目的で麦を食べた。「米粒麦」などを作り苦労して食べた。このことを体験した者は抜けがたい麦への思ひがある。妹を幼少時を麦飯を通じて偲ぶんでをられる。妻は吉保さんと同年代。異常に麦飯を嫌つた。

掲句、戦後の食糧難と一緒に越えてきた妹さん。戦友に近いと云へば云へるかも。柱の傷もおどとしのと懐かしく思ひだすことだ。私をふくめ兄弟は四人ねた。柱の傷もにぎやかであつた。（喜孝）

鯉のぼり一尾秋刀魚ぞ東京タワー

篠田純子

先の「あを」5月号の表紙の鯉のぼりは、あとがきの解説によれば、東京タワーの高さと同じ、333匹もあり、そのなかの一つぴきは、「秋刀魚のぼり」とのことです。本来の鯉に劣らず、背筋を伸ばして、立派に泳いでいます。作者はこの句に「秋刀魚ぞ！」と名乗らせていました。この「ぞ」については、純子さんにしか出来ない使い方と、常々感心しています。秋刀魚の凛々しさと、東北への、復興支援の心意気が伝わってくる句です。（典子）

轢死せしとんぼの骸剥しける

篠田純子

油虫、蝉、蚯蚓、蟻蛙などの骸が町の路上でよく見かける。無惨にも何度も車輪が上を通つたのか紙のやうになつてゐる。純子さんはそれを見過さない。ここがこの句の眼目。「剥す」といふリアリティとその行為が表はす作者の心情を味はつた。(喜孝)

夏もまだ夏に慣れずや夏の雨

篠田大佳

産調出版の『読本・俳句歳時記』には、「五月雨、梅雨、雷雨、夕立など、特色を表現した雨ではなく、普通の雨を「夏の雨」という」とあります。作者が、まだ夏と実感できない状況を、夏自体も、夏に慣れていないのではと、詠まれたのでしょうか。この季節の、雨を詠まれて、とてもいい句なのに、鑑賞が追いつきませんでした。(典子)

薰風やアドレセンスは言ひ切れり

篠田大佳

「秋収集」に収めた一句。『アドレセンス』はNetflixの話題作の題名でもある。私は未見。言語としては「adolescence」は、思春期や青春期を意味する英単語である。掲句は『』がないからドラマの題名ではなく英単語としての「アドレセンス」であらう。さう読み青春時の決断力の潔さをおもつた。しかしこの句の「アドレセンス」もNetflixの『アドレセンス』が無関係であ

るはづがない。(喜孝)

梅雨晴れ間低山歩く一日かな

須賀敏子

百名山を踏破された敏子さん。素晴らしい財産をお持ちです。そして今も、登山を続けておられるのも、本当に見事です。テレビ画面で、訪れた場所を懐かしんでいる身としては、羨ましい限りです。身の丈に合わせた山登りを、いつまでも楽しんでください。(典子)

◆◆◆
壮健なころなら高尾山などは本格登山への訓練、足慣らしといふことだ。が今はさうとは云へなくなつた。それでも山歩きの楽しみを捨てることはない。典子さんと同じく「羨ましい限り」である。(喜孝)

みどりの田へつそつとした道ここちよき

長崎桂子

みどりの口は、今は五月四日に変わつて、初夏の気候を表すようになったのですね。少し暑くなつてきた陽気でみどりの日とくれば、庭の木か街路樹の下でしようか、木陰の涼しさがありがたく感じられます。ひらがなの多さとたつぱりと語られた語り口に、木陰の心地よさを感じます。(大佳)

白牡丹といへど仄と紅二ヶ所

長崎桂子

人口に膾炙した虚子の俳句「白牡丹といふといへども紅ほのか」がある。俳句の格はさすがに及ばない。しかし掲句は掲句の存在感はある。桂子さんは作品を昇華せんとすることより、己の目で見たことを書き留めたい、といふ希ひが強い。このおもひは近作全般にわたつてゐる。(喜孝)

子育ての乙鳥は人を見てをらず

森なほ子

子育て中の燕は、本当に忙しそうです。子のための餌をくわえて、一目散に巣を目指します。お腹を空かせた子燕たちは、皆大きな口を開けたまま待っています。ひたすら飛んでいる親燕には、観察している人間など目に入りません。親としての一生懸命さに心を打たれます。景がしつかりと詠まれていて、流石です。(典子)



AIで日本人社会と燕はいつごろから共存するやうになつたかと尋ねた。「正確な年代は記録されていませんが、少なくとも江戸時代以前からツバメは人の近くで営巣していたと考えられています。日本では古くから「ツバメが巣を作る家は繁栄する」といった言い伝えがあり、民間信仰の中にも登場しています。」と。ヨーロッパ、アメリカでは人間との距離感があるさうです。中東、アフリカでは洞窟などの自然を利用して巣を作るとか。掲句を読むと日本に来た燕は安心して子育てに専心してくれてゐるやうです。(喜孝)

人住みて燕すみなす深山かな

加舎白雄

そうかもう貴方はいない夏つばめ

赤座典子

夏つばめのイメージをまず考えていきます。春に飛来したつばめは、夏になると各地に腰を落ち着けています。自在に飛来しているという例句が多く、命を広げているというイメージです。一方で、作中で明かされていない誰かと何かを共感したいが、話を聞かせたい人はそこにはいないと読みました。

作者は、鑑賞文の担当になつて、任を全うできるか悩んでおられていました。何か、手応えを感じられた時に、鎌倉喜久恵さんことを書かれていたと思います。「あを」の動静は創刊以来耳には入っていたので、喜久恵さんの訃報も突然だった印象があります。作者は呼びかける相手の名前を出していませんが、なんとなく、熱の入つた五月号掲載の鑑賞のことを思い出しました。(大佳)



この句のやうに口語も表現方法のひとつ。「さうかもうあなたはゐない夏つばめ」と比べると同じ内容なのだが句の表情が少し違ふやうだ。夏つばめに触発されて思ひ出される人。「さうかもう」と現実をうべなはなければならぬおもひを込めて詠まれた。(喜孝)

無花果が出たよさうかもう居ないのか

辻美奈子

秋收集

青竜の腹の生白梅雨あがる

佐藤 竹僕
七郎衛門吉保

蓮の風ほしいまま浴ぶ朝の池

篠田純子

透し見る蓮の葉脈手の血筋

篠田大佳

鯉の稚魚かたまり泳ぐ蓮の池

須賀敏子

梅雨の傘忘れしままに置いてあり

長崎桂子

メロンソーダ悪口あかんもう聞いたで

森なほ子

夏やカフエ赤子叫ぶもジャズの内

脇道にびつしりきれい虞美人草

蜜豆を前に静かな二人かな

高原は香りみちみち力ミモール

青梅の一粒地面明るうす

葉桜や姫出歩く時間帯

赤座典子

乗り換への束の間京の夏匂ふ

赤座典子

学童の帰路賑やかや枇杷小粒

赤座典子

梅雨ですね話題見つかる美容院

赤座典子

一人居の時の記念日ちぎれ雲

赤座典子

リモコンに遊ぶ文鳥羽抜鳥

赤座典子

新じやがや根氣で仕上ぐ煮転がし

赤座典子

賑やかな妹を送るや金銀花

赤座典子

早苗田に元気な水路歓喜あり

赤座典子

古古古米植田のとなり休耕田

喜孝抄



夏の着物 その三 木綿單衣 七郎衛門吉保

盛夏の中、日本の伝統工芸の技と美を公募で競う「日本伝統工芸展」の第七十三回が開催されている。陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・人形・諸工芸の七部門で構成され、本文テーマの着物は染織部門になる伝統的な型染め技法の一つに長板中型がある。約6.5mの長さの板に生地を張り付け、生地の両面に糊を置いて藍染めをする、表裏とも同じ柄が鮮明に現れ、藍と白のコントラストが際立つた染になる。染め柄の大きさが小紋と大紋の中間サイズなので中型と云われている。

この染め技法で第三十三回以降ほぼ毎年のように工芸展に挑戦し続いている染織作家、松原伸生氏と知己を得ることができた。氏の着物を着られた縁である
中厚手の木綿地に、藍の四角辺と丸型白抜きとの連続模様は、アラビア風の中に日本の粹を見て取れる。小じやれた単衣となり、数年後に購入した帯との組み合わせはお気に入りの着物セットとなっている。
作者は二〇一四年の同展において長板中型着尺「漣

文」が当時の最高榮誉であつた高松宮記念賞を受賞した。さらに二〇二三年には無形文化財保持者に認定された。人間国宝作の着物を着ることばゆさがあるが、他方で密やかな喜びを噛み締めたりもしている。
『あを』二〇一八年九月号に掲載した。この着尺に合わせて選んだ久保田万太郎の句は

水中花咲かせしまひし淋しさよ



22

流れつくれば嬉々と逆らふ鉢目高

佐藤喜孝

庭に使はなくなつたブリキ製の衣装ケースでビオトープのまねごとをしてゐる。雨水がすぐ溜まつた。雨水が貯まると蚊の心配が生じた。近くの店で一番安い紺目高を見るだけ(十四ぐらい)買つて放した。少し寂しいかなとネットで高級な目高を買つた。この目高たちは数日のうちに全滅した。紺目高は元気に冬を越したが、雨の日の増水を期に逃げ出してしまひ今は三四。いつの間にやらヤゴが棲みつき蜻蛉になつてくれたりした。生まれた糸蜻蛉は長くこの水場を離れない。孵化した数ミリの目高の子を見つけた時はうれしかつた。親に食べられるらしいので網でひたすら掬つて別の容器に移した。今は大きくなり親と一緒に泳いでゐる。數十匹ほどの目高に餌をやるのが仕事になつた。

と、目高の句を作つて楽しんでゐた先日、あつ、さうだと掲句を思ひ出した。十代のころ朝日俳壇に投句した一句である。中村草田男選に入り嬉々としたことを思ひだした。景品に葉書が送られてきた。その葉書でせつせと投句したが以後は梨の礫。葉書が切れたので投句もやめてしまつた。中村草田男が選をしてゐたときは山口誓子・星野立子・加藤楸邨と共に選であつた。この句は覚えてゐるのだが目高を飼つてゐた記憶はスッポリ抜けてゐる。

決勝戦術無く終り九月尽

イ・キ・オ・イーと黄色い叫び九月場所

ひと知れず祈りの行者九月尽

先見えぬ踏絵の連鎖九月果つ

「ひよっこ」に自分史重ね九月尽

大病を生きぬいてゆく九月尽

九月来る早三回忌トモ子さん

建壳りに未だ万国旗九月尽

九月一日小まめに洗ふ皿ちやわん

画布伸べて夫は九月で傘寿なり

コロナ禍も峠を越して九月尽

九月尽解除解任解散と

震源は能登半島や九月の夕

九月にも真夏日続くこの頃変

寂寥のただよふ庭や九月尽

若人の自撮りの笑顔九月尽

否定形にしたき季語ある九月かな

〔葉月〕は陰暦八月。

赤座 典子

篠田 純子

秋川 泉

赤座 典子

秋川 泉

赤座 典子

須賀 敏子

須賀 敏子

赤座 典子

須賀 敏子

須賀 敏子

七郎衛門吉保

長崎 桂子

須賀 敏子

秋川 泉

都築 繁子

七郎衛門吉保

長崎 桂子

須賀 敏子

秋川 泉

赤座 典子

佐藤 恭子

赤座 喜孝

赤座 典子

赤座 典子

赤座 典子

森山のりこ

赤座 典子

大日向幸江

秋川 泉

大日向幸江

佐藤 恭子

竹内 弘子

東 亜 未

遠藤 実

赤座 典子

森 理和

ねむる間に葉月の過ぎる真夜の月
陰ふかく心地よき道葉月かな
揉んでぬて水匂ひだす葉月かな
宵の風背筋ひやりの葉月かな

「八朔」は旧暦八月一日。田の実節句。早稻の穂が実
る時期にあたり、農民が初穂を恩人や親しい人に贈る風
習があつた。「田の実」を「頼み」にかけて、感謝の気
持ちを表す日とされた。

今もなほ八朔ばたもち配り来る。 関口 ゆき
八朔を信濃にありて風つかむ。 鎌倉喜久恵
八朔にざわつと風のたつもよし。 鎌倉喜久恵
八朔や阿久悠硬派全うす。 赤座 典子
「重陽」の節句。中国の風習、日本では奈良時代より
觀菊の宴が行われた。

花手水敷き重陽の大神宮
秋は食欲の秋ともいはれる。食べ物飲み物の俳句を
濁酒酒井田柿右衛門の青
岩室に濁酒を封じ漆搔

渡邊 友七
長崎 桂子
佐藤 竹僕
長崎 桂子

佐藤 嘉恵

森 理和

赤座 典子

芝宮須磨子

赤座 典子

森 理和

佐藤 恭子

竹内 弘子

松本 米子

鎌倉喜久恵

森 理和

田中 藤穂

竹内 弘子

赤座 典子

新蕎麦を説く友の居り

新蕎麦がへぎに並びし匂ひたつ

新蕎麦に一箸一点山葵添え

新蕎麦や口腔で息吹き返す

くらがりに髭長だるま新蕎麦待つ

新蕎麦やガラス戸の外椿象這ふ

新蕎麦と熱き蕎麦湯に能書と



女性陣結構お酒の句がありましたのもしい。

白雪夜ひとりが上上古酒を酌む
土室にひんやりと古酒置いてあり
新酒古酒夫の秘蔵は蜂焼酎
ふるさとの正月静か古酒の酔
寡黙なる縁戚に古酒携へて
ましら酒一瞬奈落へ竦む夢

新そばや古き暖簾を潜りけり
新蕎麦や風を伴ふ通り雨
新蕎麦や外人さんがたべてはる
新蕎麦やゆつくり話す人になり
新蕎麦やあかい湯桶の折鶴めく
新蕎麦を食せり古き学生街
練り込んで伸して新蕎麦鄙の村
新蕎麦や薬味不要と戴ける
予約して新蕎麦の客賑やかに
新蕎麦や雨降る村を訪ねたり
走り蕎麦汁は田舎のだしの味
十人ほど相席となる走り蕎麦
茹汁の白くにこれる走り蕎麦
鰯節の目笊にかわく走り蕎麦
良く嚼んで芳しきかな走り蕎麦
走り蕎麦宿の主がごゆるりと
しもたや風の二階に上る走り蕎麦

森山のりこ
長崎 桂子
定梶じょう
赤座 典子
竹内 弘子
大日向幸江
長崎 桂子
須賀 敏子
大日向幸江
鎌倉喜久恵
竹内 弘子
竹内 弘子
森 弘子
鎌倉喜久恵
竹内 弘子
鎌倉喜久恵
竹内 弘子
竹内 弘子
森 理和
竹内 弘子
鎌倉喜久恵
竹内 弘子
鎌倉喜久恵

信濃への旅一つには走り蕎麦	赤座	典子
しもたや風の二階に上がる走り蕎麦	竹内	弘子
走り蕎麦通のふりして十割を	斎藤	裕子
一滴も呑まずに出でし走り蕎麥	佐藤	竹僕
「きぬかつぎ」とはなんと雅な命名なのだらう。この		
名前でついつい箸が伸びる。		
母恋ふや剥きてぬくとき衣被	田中	藤穂
衣被あましよ稿にせかされつ	定権じよう	
茹で上げて芋名月の衣被	木村	茂登子
白ふきん掛け大笊の衣被	田中	藤穂
衣被世の少子化をとどめたし	田中	藤穂
少子化の世とも思へず衣被	井上	石動
衣被珍な稚児僧突如出で	赤座	典子
秋刀魚が不漁続きたが今年はうれしいことに豊漁		
と聞く。庶民の魚に戻つた。秋刀魚一尾百円だが大根は		
一本二百円であつた。		
辛口の酒ゆつくりと初さんま	赤座	
氣仙沼秋刀魚の口の黄色くて	須賀	
	敏子	

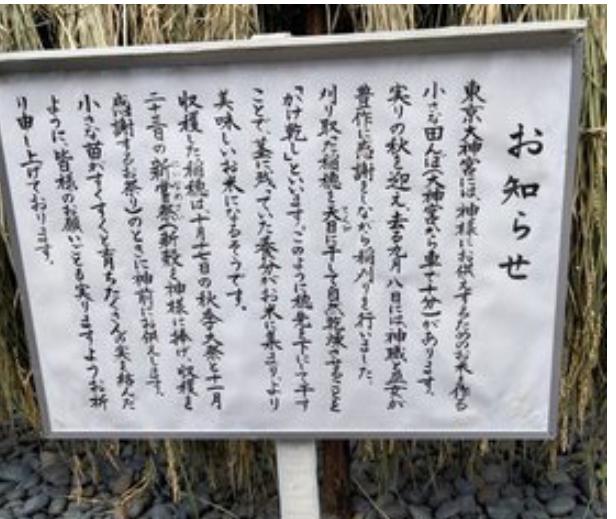
赤座 齋藤 弘子
佐藤 竹僕 典子
田中 藤穂 たうつ。この
定梶じょう たらつ。
木村茂登子 田中 藤穂
田中 藤穂 田中 藤穂
赤座 典子 井上 石動
井上 石動 いことに豊漁
いことに豊漁 だが大根は
須賀 敏子

A vertical illustration of a flowering plant. The plant features several green stems with small, oval-shaped green leaves. Clusters of flowers are arranged along the stems, each cluster containing four to six flowers. The flowers are white with distinct pink centers. The overall composition is a simple, elegant botanical illustration.

少年來てボツリと秋刀魚食ひだしと
民宿の秋刀魚の刺身大皿に
さんまさんまそが上に振る赤穂塩
唱へつつ顔の短き秋刀魚焼く
久に逢ふ吾子と夕餉の秋刀魚焼く
さんま嫌ひの妻とも長き縁なる
居酒屋の秋刀魚いつぴき紐育
盆の月兔さんまだ居れますか
初秋刀魚鮨屋の背の丸くなり
軒低く古りし居酒屋秋刀魚鮨
横一文字に秋刀魚焼上がる
煙ほどさんま焼けてはをらざりし
秋刀魚焼く子供の頃は炭だつた
さんまさんま宮古のさんま流石なり
女子会や意見の多き初さんま
女子会や意見の多き初さんま
秋刀魚には石垣の塩ひとつまみ
サンクスで秋刀魚は買はずつでも

吉里は秋刀魚は干物で食べる物	大日向幸江
黄昏るるカレーの匂と秋刀魚の香	大日向幸江
折鶴を折つたその手で秋刀魚焼く	田中 藤穂
抵抗の一票投じ秋刀魚買ふ	田中 藤穂
煙り出ず秋刀魚の香ぼやけり	秋川 泉
軋轢と読みもむづかし秋刀魚焼く	赤座 典子
秋刀魚焼く薄き煙の懐かしき	大日向幸江
秋刀魚焼く今年の秋刀魚恋しかり	田中 藤穂
秋刀魚だよ十円だつて早く来て	七郎衛門吉保
味薄く目黒の秋刀魚恋しかり	秋川 泉
秋刀魚だよ十円だつて早く来て	七郎衛門吉保
腸くらふ秋刀魚高値の苦味かな	佐藤 竹僕
原發することといへば秋刀魚焼く	須賀 敏子
隣より声のかかりて初秋刀魚	七郎衛門吉保

千代田区富士見の東京大神宮に「かけ乾し」されて
いる稻穂です。例年九月ごろに神職と巫女が神社近く
の水田で稻穂を刈り取り、境内で天日干しにしていま
す。稻穂は、秋季大祭や新嘗祭にお供えされて、一年
の豊作を神に感謝します。(撮影:不寛)



八月号の発行日が八月五日。さあ追いつくと期待に
胸が膨らんだ。好事魔多し。パン「ンが壊れ、バック
アップファイルがなぜか消え、復活するのに大分時間
を使つた。また一からやり直しである。使ひやすくす
るためにはまだまだ時間がかかる。Windows 10から
11にしただけでシャツアウトするのにもつるつるす
る始末。なぜかうも仕様を変るのだいつ。変たからと
いつて特段便利になつた訳ではないのに。(喜孝)

一〇二五年九月号	発行日	九月二十三日
	〒	177-0042
東京都練馬区下石神井一丁目六の三	サンハイツ石神井2	一階
収穫した稻穂は十月七日の秋季大祭と十一月	印 刷	090 98284244
二日音の新嘗祭と新嘗祭と神様に捧げ、稻穂を	カット・製本・レイアウト	エイマ
感謝するお祭りのときに神前にお供えします。	会 費	一五〇〇〇円(送料共) / 一年
小さな苗がすくと育ちないうちに茎を折んだ	ゆうちょ銀行(普)	4586402
ように皆様のお願いども承りますよしお折	佐藤 喜孝(サトウヨシタカ)	
り由一上げております。		